



学校だより

～ ひびきあう心 かがやく笑顔 ふれあいの丘 斎藤分 ～

令和5年 2月 28日 3月号

横浜市立斎藤分小学校 校長 黒木 健

「非認知能力」とは何か？

校長 黒木 健

日を追うごとに早春を感じられる天候となつてまいりましたが、本校保護者の皆様、地域の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。さて、今年度最後の学校だよりは、「非認知能力とは何か？」と題して話をさせていただきます。

教育界には、その時代の政治的 policy、世論や潮流などを反映した様々な教育用語が存在しています。思いつくままに古いものから挙げていくと、「受験地獄」、「ゆとり教育」、そして最近では「ICTの活用」や「個別最適な学び」等々、枚挙にいとまがありません。今回ご紹介したい「非認知能力 (non-cognitive skills)」も、用語としては以前から存在していたのだと思いますが、ここ数年、教育関係者の中で頻繁に語られるようになり始めた用語の一つです。先ずその定義ですが、「テスト等で評価される学力的な能力のことを『認知能力』と言うのに対し、『非認知能力』とは、物事に対する考え方、取り組む姿勢や実際の行動等、社会生活において重要な影響を及ぼす能力」のことを示すとされています。時に、自己調整能力、社会情動的スキル等と呼ばれることもあります。

では、小学校での学習における具体から見ていくことにしましょう。低学年の「生活科」は、生活をしていく中で、生活の本質や真意を理解感得していくこと等をめあてとしています。例えば、朝顔の世話をすることを通じて、自分が朝顔を世話する存在であることや、またこれまで世話をされる存在だった自分が逆に朝顔の世話をする主体へと変化したことに気づき、今日は学校に行きたくないと思うことがあっても、学校に行つて朝顔の世話をしなくてはと思う心をもつことへとつながっていきます。このように自分を律することができる能力も非認知能力の一つと言えます。同様に「生活科」の「まち探検」では、よく知っていると思っていた町を「探検」というメガネをかけて改めて眺めてみることで、町との新たな関わりやその関わりの質の変化に気づき、その結果、自分として、これから町とどう関わりをもちたいのか等の気持ちが生まれてくるのが期待されています。これも非認知能力の萌芽と言えます。また教科教育以外でも、例えば学級会において、いくつかの異なる意見が出た場合でも、単純に多数決で一つの答えに決めてしまうのではなく、その出された答えを一つにまとめてみたり、或いはどの答えでも受け入れることができるような生活環境を考えてみたり等、日々の学習の様々な場面で、非認知能力の育成は行われていると言えます。

ただここで大切なのは、非認知能力だけを育てようとするのではなく、それを認知能力と非認知能力との互惠性の中で育成していくべきであるという点です。そして「非認知能力を育成するためには、先ずはその子どもの関心事を受け入れることが大切である。」と奈須教授（上智大学 - カリキュラム論）は述べています。加えて、関心事はあるがまだよくは分からない対象があるとして、でもその分からないということを見捨てただけ答えを教えるのではなく、その分からなさを生かしつつ答えを探究していくというアプローチを大切にすべきだとしています。非認知能力の育成については、今後、多角的な見地からより一層の議論が必要だと感じているところです。

さて今年度も残り僅かとなりました。今年度におけます皆様方の本校教育活動へのご理解、ご協力に対し、この場をかりまして、心より深く感謝を申し上げます。 *Thank you for all.*